

酒呑童子山地域の自然を考える

酒呑童子山地域は、昭和26年（1951年）に指定された津江山系県立自然公園の地域内にあります。指定当時は尾根にはブナ、モミ、ツガ、山腹にはアラガシやウラジロガシ、谷にはサワグミ、カツラの林が広がり、優れた森林に覆われた地域でした。

戦後の造林計画などによりスギの人工林化が進み、現在ではわずかに稜線や谷の一部に自然林が残る状況となっています。

最近では、1991年と1993年の台風によって林地は大きな被害を受けました。林地の災害復旧を行うに当たり、できるだけ自然環境の保全や自然保護との調和を図っていくことも大切です。また、地域の新しい産業や地域活性化のための観光と自然環境のとの調和を図っていくことも大切です。

こうした保護と利用のあり方を通じてみんなで酒呑童子山地域の自然について考えてみましょう。

貴重な植生や貴重な植物

酒呑童子山地域にはブナ林やモミ林があり、ツクシシャクナゲやハイノキなどに関係の深いたくさんの種類の植物が見られます。また、谷にはカツラ林があり、コチャルメルソウやヒメナベワリなどのカツラ林と関係の深いたくさんの種類の植物が見られます。

今回の調査でその植物の種類は668種が確認されました。このうち耶馬日田英彦山国定公園の指定植物が27種、九州中央山地国定公園と祖母傾国定公園の指定植物が36種、指定植物に準じる植物が38種ありました。この結果、貴重な植物は101種もあり、全体の約15%も占めています。これらは酒呑童子山地域にわずかに残された自然林の中で確認されました。このような貴重な植物が将来にわたって生きていくにはどうしたらよいのでしょうか？

*** 指定植物：**国立公園や国定公園ごとに貴重な植物を法律により指定しています。この地域の山に生えているツクシシャクナゲやベニドウダン、イワタバコなどは、すぐ近くにある日田耶馬英彦山国定公園の指定植物です。





酒吞童子山地域を望む

生き物がすみやすい環境をつくろう

植物や動物にとってすみやすい環境とはどんなものでしょうか？まず、たくさんの種類の植物がある森を考えてみてください。そこには植物を食べる小さな昆虫がたくさん集まります。そしてその小さな昆虫をえさにする大きな昆虫やカエルやヤマメなどの魚がたくさん集まります。そしてこれをえさにする鳥が集まります。こうしてたくさんの種類の動物が集まり、豊かな自然環境ができます。多くの生き物が食べたり食べられたりする（これを食物連鎖といいます）厳しい環境ですが、生き物全体から見るとよい状態です。このような状態は生物多様性と呼ばれており、最近では新聞やニュースでよく使われる言葉です。

生物の多様性を増やすためには、たくさんの種類の植物が生きているような状態をつくる必要があります。例えば、スギやヒノキの針葉樹の人工林にクヌギやケヤキなどの広葉樹を植えて豊かな森にすることが考えられます。

豊かな森は緑のダム

生物多様性の豊かな森は、たくさんの生き物が集まって生活しています。

みなさんは「緑のダム」という言葉を聞いたことがありますか？豊かな森は緑のダムと呼ばれています。それは雨が降ると、雨はゆっくりと地中にしみこみ、まるで森が雨水を蓄えてダムのような働きをするからです。雨水は長い年月を経て、わき水となって地上にでてきます。また、地中の雨水は植物の根から吸い上げられ、生きるための活動に使われます。

もし、森林がなくなると、雨は一気に河川に流れ込んでしまい、河川の氾濫の原因にもなります。

みなさんも森がとても大切なことに気づかれたでしょう。ただし、その地域に住む人にとっては、産業の振興も大切です。それでは、産業の振興のためには、上手に森を活用するにはどうすればいいのでしょうか。みなさんで話し合ってみてください。自然の賢い利用（ワイズユーズといいます）についてみんなで考えてください。



ブナの実



モミ林の紅葉